

金沢大学資料館所蔵考古資料に関する調査研究 2018

Research on Archaeological Materials owned
by Kanazawa University Museum in 2018

金沢大学資料館特任助教 松 永 篤 知

Atsushi MATSUNAGA

1. はじめに

平成29年度において、筆者は金沢大学資料館が所蔵する考古資料の基礎的情報整理をおこない、その学術的価値について『金沢大学資料館紀要』第13号に記した(松永2018a)。その中で、当資料館には、「四高考古資料」・「井上鋭夫発掘資料」・「一乗谷朝倉氏遺跡出土資料」を三本柱として、縄文時代から近世までの多種多様な考古資料が豊富に存在することを明らかにした。さらに同年度中、石川県博物館協議会職員研究奨励事業(研究テーマ名「金沢大学資料館所蔵考古資料の再評価」)の助成を受けて、当該考古資料の実測図化や、関連資料調査・現地確認調査なども実施した。その成果は、石川県博物館協議会総会および同会会報や、資料館の常設展・企画展を通じて発信している¹⁾。平成30年度においても、引き続き金沢大学資料館所蔵の考古資料に関する各種調査研究を実施しており、12月までの成果を速報的にここに記す(一部、平成29年度末に実施したものを含む)。

2. 四高考古資料に関する調査研究

旧制第四高等学校旧藏品(北陸人類学会採集品が中心)を受け継いだ四高考古資料は、金沢大学資料館が所蔵する考古資料の中でも、特に多種多様な資料群である。やきもの一つとっても、縄文時代前期の縄文土器から近世金沢城跡の陶磁器類まで、各時代・各時期の資料が揃っている。これもひとえに、四高で教鞭を執った須藤求馬氏をはじめとする、北陸人類学会の精力的な収集活動の賜物であろう(在田1996・1997)。この四高考古資料について、以下の調査研究を実施した。

1) 遠隔地採集遺物に関する調査

四高考古資料は、北陸人類学会採集品を主軸とするため、当然石川県・富山県・福井県のものが多いが、実際は北陸地方以外のものも少なからず含まれる。中でも、筆者が気になったのが、東北地方と四国地方の遺物である。そこで、これら遠隔地採集遺物について、二ヵ年度にわたり石川県博物館協議会の助成を受けて現地での各種調査を実施した(図1)。

東北地方の遺物については、「盛岡市内上米内驛附近チャシ出土品」・「紫波城址出土」の筆注記

が残るものがあり、これらは岩手県盛岡市および同県紫波郡紫波町から採集したものであることが浮上した。そこで、昨年度末の2018年3月13日から15日にかけて（移動含む）、盛岡市遺跡の学び館での市内出土遺物調査と、採集地の可能性がある場所の現地確認調査を試みた。前者は、盛岡市域の考古資料がどのようなものであるかを把握することと、四高考古資料採集地に関する現地情報を得ることが目的である。一方後者は、盛岡市遺跡の学び館で得た知見・情報を踏まえ、採集地の可能性がある場所の立地や環境を実際に確認することが目的である。

さて、金沢大学資料館には、「盛岡市内上米内驛附近チャシ出土品」と注記された遺物は3

点あり、いずれも縄文土器片である（図2-1～3）。文様などの特徴から、一見して縄文時代前期末～中期初頭の大木式土器の類と思われるが、胎土は繊維を含まず中期的で、盛岡市遺跡の学び館の津嶋知弘氏・神原雄一郎氏から中期初頭大木7a式への位置づけを指摘された。さらに両氏から、これら縄文土器片の採集地は、JR山田線上米内駅の付近にある畑井野遺跡（草間・吉田1959）である可能性が高いという情報を得た。畑井野遺跡が所在する標高約230mの台地は、「米内館」や「蝦夷館」の通称があるとのことで、「館」は「チャシ」に通じる。まさに「上米内驛附近チャシ」の注記に合致する場所と言えよう。そもそも、畑井野遺跡は、縄文時代前期末～中期初頭の遺物が多数出土することで知られており、縄文土器研究の第一人者である山内清男氏が踏査したこともあったという。この、周知の畑井野遺跡出土遺物の時期も四高考古資料と矛盾なく、どうやらこの地が当該資料の採集地と考えて良さそうである。今回、筆者が現地を訪ねた際にはまだ雪が残っており、残念ながら台地の上まで行くことはできなかったが、台地の下にも縄文土器片が散見され（図3）、四高時代においても表面採集は容易であったものと推測される。

これらの縄文土器が具体的にどのようにして当資料館に收藏されるに至ったのかは、未だ分からないが、昭和期頃²⁾に著名な縄文遺跡で採集されたものが、研究資料あるいは教材として旧制第四高等学校および後身の金沢大学に収められることになったのであろう。

もう一つの「紫波城址出土」と注記された遺物は、外面タタキ痕・内面当て具痕の残る須恵器甕類体部片1点である（図2-4）。岩手県で「しわじょう」と言えば、延暦22年（803年）に坂上田村麻呂が築いた古代城柵「志波城」のことであろう。「シハ（しわ）」は、「志波」・「斯波」・「紫波」と表記されることから、「紫波城址」は「志波城址」と同義と見て良い。ただし、現在の志波城比定地は、



図1 現地確認調査の対象とした主な遺跡の位置図

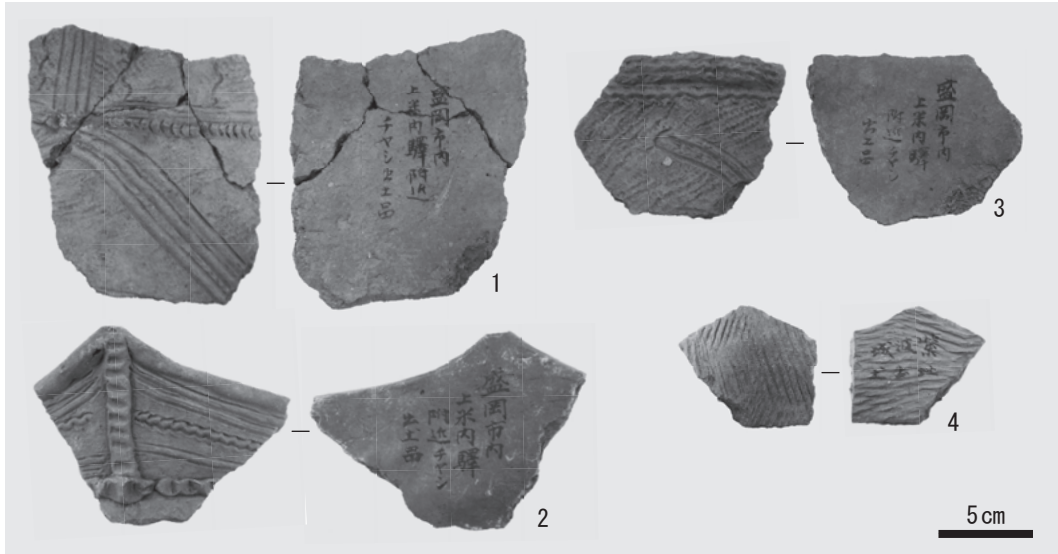


図2 四高考古資料の岩手県内採集遺物

盛岡市下太田方八丁ほか地内であるが、それは昭和51・52年の東北自動車道建設に伴う発掘調査以降、明らかになったことである（盛岡市教育委員会1981）。当該資料の採集年がいつかは分からないが、注記の筆致などから見て、少なくとも昭和50年代以降に採集された可能性はない。さらに、盛岡市遺跡の学び館において、当資料館の「紫波城址出土」須恵器片は、太田方八丁発掘以前に志波城比定地とされていた場所の一つ、高水寺城跡である可能性を指摘された。そこで、紫波町高水寺城跡（紫波町城山公園）を訪ねることとし、念のため現比定地の盛岡市志波城跡（志波城古代公園）も見ておくことにした（図4）。この現地確認調査では、どちらにおいても遺物の散布状況は分からなかったが、丘陵地の高水寺城跡の方が、平坦地の志波城跡よりも遺物を採集できそうな印象を受けた。「盛岡市内上米内驛附近チャシ出土品」ほどの絞り込みはできないものの、やはり高水寺城跡を含む紫波町内の旧志波城比定地から採集されたのであろう。



図3 岩手県内現地確認調査地の現況写真1（左：畑井野遺跡、右：畑井野付近で見た縄文土器片）



図4 岩手県内現地確認調査地の現況写真2 (左：志波城跡、右：高水寺城跡)

以上、四高考古資料の岩手県内採集遺物については、今回の調査で盛岡市畑井野遺跡と紫波町旧志波城比定地（高水寺城跡）のものである可能性が高いことが明らかとなった。

続いて、四国地方の遺物については、「阿波國」・「阿波美馬郡重清村荒川名の塚穴」と筆注記された古墳時代の須恵器があり、徳島県出身の四高教員、須藤求馬氏による採集品であることが真先に思い浮かんだ。北陸人類学会発起人総代であった須藤氏は、同県美馬郡穴吹町三島（現美馬市）出身であり（在田1996）、このあたりには段の塚穴型石室を持つ後期古墳（TK43～209型式期）が多数存在すること（岡山・中川2009）に行き着いた。そこで、2018年12月9日から10日にかけて（移動含む）、美馬郷土博物館（願勝寺内）および美馬市立三島中学校での市内出土遺物調査と、採集地の可能性がある場所の現地確認調査を実施した。基本的な調査方針は岩手県内調査と同様で、前者は、美馬市域の考古資料がどのようなものであるかを把握することと、四高考古資料採集地に関する現地情報を得ることが目的である。そして後者は、美馬市内で得た知見・情報を踏まえ、採集地の可能性がある場所の立地や環境を実際に確認することが目的である。

徳島県域の注記がある須恵器は、四高考古資料に2点ある（図5）。一つは、内面中央に「阿波國」とのみ注記された須恵器杯Hの杯身である。完形品で、口径13.4cm、器高4.4cmをはかり、器形などの特徴から古墳時代後期・6世紀後半に位置付けられる。

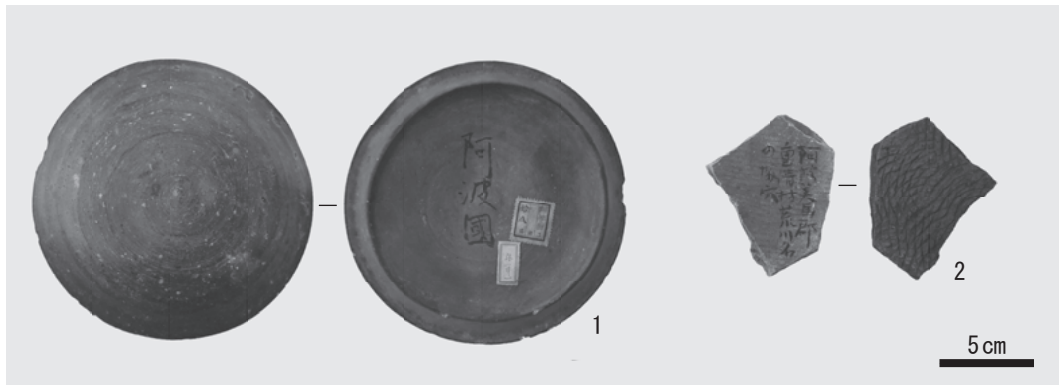


図5 四高考古資料の徳島県内採集遺物

もう一つは、「阿波美馬郡重清村荒川名の塚穴」と注記された須恵器甕類体部片である。外面にタタキ痕、内面に当て具痕が残される。破片資料のため、詳細時期などは不明である。ただし、「重清村荒川名の塚穴」という具体的な地名情報があることから、段の塚穴型石室を持つ荒川古墳からの採集品である可能性が高い。

市内出土遺物調査としては、美馬郷土資料館で願勝寺1号墳などの出土資料を、三島中学校で三島1号墳の出土資料をそれぞれ実見および撮影し、美馬市域における古墳時代後期の須恵器の特徴をつかんだ。そして現地確認調査では、市内の後期古墳である、荒川古墳・段の塚穴(太鼓塚古墳・棚塚古墳)・野村八幡古墳・三島古墳群(三島1号墳・三島2号墳)・三谷古墳を見て回り、美馬市域の古墳がどのような構造や立地、環境であるかを確認した。これらのうち、荒川古墳と三島古墳群は、当初から四高考古資料採集地の有力候補地として考えていたため、より時間をかけて現地確認した(図6)。結局、美馬市域には今回訪ねた古墳以外にも多数の後期古墳が築造されているため、特に杯身の方は採集地を特定できないが、少なくともこの地域のものであることは間違いなさそうである。須藤氏が故郷の古墳から採集した須恵器が、北陸人類学会の活動などを通して旧制第四高等学校所蔵となったと理解するのが最も妥当であろう。

なお、須藤求馬氏は、近年地元の偉人(北陸人類学会の創始者)として評価されていること(美馬市教育委員会2012)を、美馬市教育委員会の拜郷哲也氏と三島中学校校長の横島道彦氏から教わった。特に三島中学校の「平成25年度プラスワンスクール ブラッシュアップ事業 三島の三賢人と洪水遺産・文化遺産」では、三宅速(世界的な内蔵外科医)・岡本監輔(樺太探検志士および漢学者)とともに、「三島の三賢人」の一人とされている。今回、筆者が興味を持ったことも何かの縁である。四高の後身校である金沢大学としても、須藤氏の業績を再評価するのを感じた。



図6 徳島県内現地確認調査地の現況写真(左:荒川古墳、右:三島1号墳)

以上のように、遠隔地採集遺物に関する各種調査を実施したが、盛岡市の調査地は金沢市から直線距離で530km超、美馬市の調査地は直線距離で360km超の位置に所在する。四高考古資料の収集活動が、実に広範囲に及んでいることを、身をもって実感した。そのような先人の遺産が、当資料館に今も受け継がれていることは、もっと誇るべきである。

2) 磁性と比重に基づく「蛇紋岩質」磨製石斧の石材調査

今年度の四高考古資料に関する調査研究として、もう一つ実施したのがある。それが、磁性と比重に基づく「蛇紋岩質」磨製石斧の石材調査である。長らく日本考古学においては、「磨製石斧

＝蛇紋岩製」という認識があったが、近年の研究により、蛇紋岩製とされてきた磨製石斧の多くが透閃石岩であることが指摘されるようになった（飯塚2017、中村2010・2015・2017）。蛇紋岩であろうと透閃石岩であろうと、北陸地方では糸魚川市および周辺の青海・蓮華地域が主たる産地と推測されることから（透閃石岩の方がより限定的ではあるが）、従来の石材産地研究の視点は、決定的外れではなかったと思う。しかし、蛇紋岩と透閃石岩には比重・硬度・耐衝撃性などに違いがあり、透閃石岩の方が磨製石斧に適した性質（比重が大きく、硬くて、衝撃に強い）を有するとされる。そこで、近年の指摘に基づき、四高考古資料の磨製石斧の石材について一度検討してみても良いだろうと思い、今回それらの磁性と比重を調べてみることにした。

さて、蛇紋岩と透閃石岩の分かりやすい違いとして、前者は磁性が極めて強く比重は2.5前後、後者は磁性が極めて弱く比重が2.9前後という点が挙げられる（中村2010・2015・2017）。そこで、『資料館だより』第8号において「蛇紋岩質」および（蛇紋岩・透閃石岩と同一産地の石材の可能性が高い）「翡翠質」と報告されている磨製石斧（佐々木・在田・大浜1996）18点（箱B・C）に対し（図7）、ネオジウム磁石（Neodymium magnet）を使って個々の磁性をテストするとともに、アルキメデス法による比重測定を試みることにした。蛍光X線分析装置などの機器を使用すれば、よ

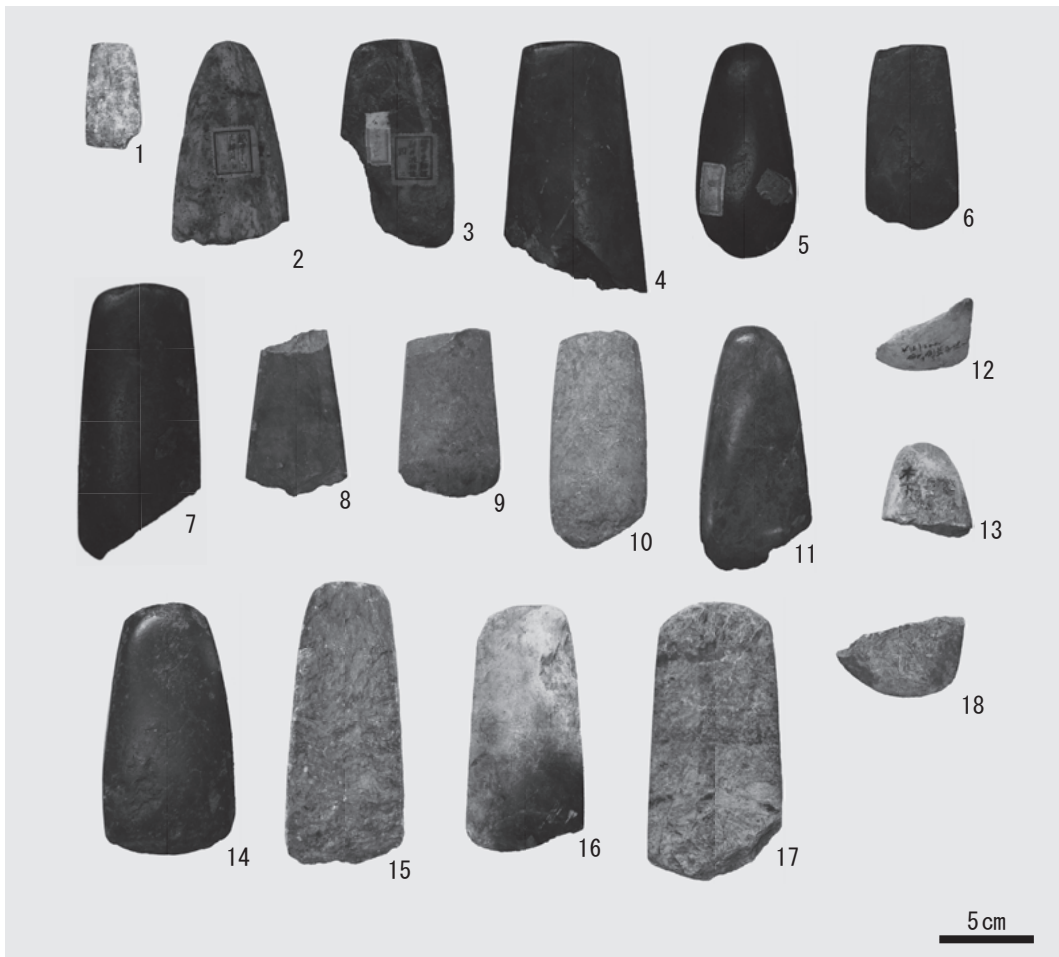


図7 磁性と比重に基づく石材調査の対象とした磨製石斧

り精度の高い岩石鑑定ができると思うが、設備や予算などの制約上、今回は手軽な手法を選択した。

なお、磁性テストにあたっては、様々な種類があるネオジム磁石の中でも、直径8mm×厚さ3mmの環状タイプで、グレードN35、表面磁束密度300mT（3,000ガウス）のものを使用した。磁性の強さは、中村由克氏の研究（中村2010・2015・2017）を参考に、強（磁石を資料に近づけた際に、約1cmの距離で磁石が強く引き付けられて自重で落ちない）・中（約5mmの距離で磁石が引き付けられるが自重で落ちる）・弱（約2～3mmの距離で磁石が弱く引き付けられる）・極弱（いくら近づけても磁石がほとんど反応しない）の4段階区分で表現することにした。

比重測定にあたっては、デジタルばかりで資料の元々の重さを量った後、木綿糸で吊るした資料を水の入った容器に浮かべた状態にして改めて重さを量り（水を入れた容器の重さは0とする）、前者の重さを後者の重さで割って算出した。

以上の磁性テストと比重測定を、図7の磨製石斧に対して実施した結果が表1である。今回調査対象とした「蛇紋岩質」磨製石斧は、磁性が弱く、比重2.9前後のものが大半を占めていた。「翡翠質」とされたものも翡翠（比重3.2～3.4）より比重が小さく別材である。明らかに磁性が強かったのは、図7-3の1点のみであった。また、図7-17に所々磁性の強い箇所が認められたが、透閃石岩に蛇紋岩が部分的に含まれるような石材なのであろう。比重が2.5程度のもは、図7-10の1点である。ただし、この資料は磁性が極めて弱かった。

このように、四高考古資料の磨製石斧についても、近年の指摘通り、その多くが蛇紋岩以外の石材で作られたようである。すなわち、外見上は蛇紋岩に似るが磁性が弱く比重の大きい、透閃石岩やそれに類する石材と見られる。磨製石斧には、狭義の蛇紋岩よりもこれらの石材の方が適していたのであろう。しかし、今回実施したのはあくまでも簡易的な調査であり、正確な岩石名は今後より高度な専門知識に基づいて明らかにすべきである。

資料番号 (本稿)	資料番号 (だよりNo.8)	石質 (だよりNo.8)	注記地名／遺跡名 (だよりNo.8) ※現時点で消失している注記あり	採集遺跡の時期 (だよりNo.8)	磁性	重量	比重
図7-1	1	翡翠質	天神山／富山県魚津市天神山遺跡	縄文時代中期	弱～極弱	27g	2.70
図7-2	2	蛇紋岩質	天神山／富山県魚津市天神山遺跡	縄文時代中期	弱	247g	3.00
図7-3	4	蛇紋岩質	越中東砺波郡井波付近／富山県南砺市閑乗寺山遺跡か	縄文時代中期	強	211g	2.93
図7-4	5	蛇紋岩質	越中東砺波郡井波付近／富山県南砺市閑乗寺山遺跡か	縄文時代中期	弱～極弱	430g	2.90
図7-5	6	蛇紋岩質	越中東砺波郡井波付近／富山県南砺市閑乗寺山遺跡か	縄文時代中期	極弱	191g	2.94
図7-6	7	蛇紋岩質	越中東砺波郡金屋／富山県砺波市金屋ボンボン野遺跡	縄文時代中期	中～弱	158g	2.93
図7-7	8	蛇紋岩質	越中東砺波郡金屋／富山県砺波市金屋ボンボン野遺跡	縄文時代中期	弱	340g	2.93
図7-8	10	蛇紋岩質	越中上野方村石垣／富山県魚津市石垣遺跡	縄文時代中期～晩期	弱	141g	2.94
図7-9	11	蛇紋岩質	越中新川南加積村／富山県上市町永代・野島・広野新・松原野遺跡か	縄文時代中期～晩期	中～弱	149g	2.71
図7-10	12	蛇紋岩質	越中愛本新／富山県黒部市愛本新遺跡	縄文時代中期～晩期	極弱	197g	2.40
図7-11	13	蛇紋岩質	加賀石川郡笹塚／石川県金沢市北塚遺跡	縄文時代後期～晩期	極弱	353g	2.94
図7-12	15	翡翠質	宝達通称中尾／不明	不明	弱	34g	2.83
図7-13	18	翡翠質	越□国木下／不明	不明	極弱	67g	2.68
図7-14	20	蛇紋岩質	不明	不明	極弱	543g	2.98
図7-15	21	蛇紋岩質	不明	不明	弱～極弱	463g	2.93
図7-16	22	蛇紋岩質	不明	不明	弱～極弱	339g	2.83
図7-17	23	蛇紋岩質	不明	不明	中～弱 (局所的に強)	529g	2.91
図7-18	24	翡翠質	不明	不明	極弱	63g	2.74

表1 四高考古資料磨製石斧の石材調査結果

3) 実測による研究資料化

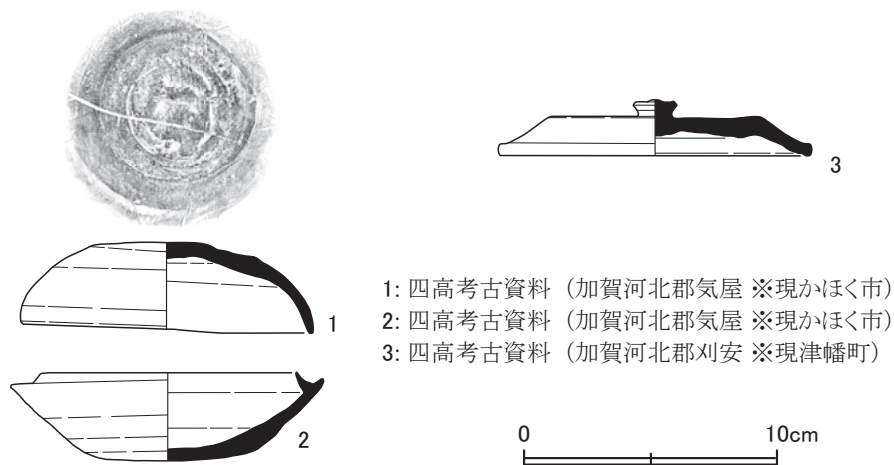
昨年度・今年度とも、実測による研究資料化を実施した。すでに『金沢大学資料館紀要』第13号に縄文時代～江戸時代の土器・陶器・瓦の実測図12点分を掲載しているが（松永2018a）、今回新たに古墳時代～古代の須恵器3点の実測図を提示する。

図8-1は、古墳時代の須恵器杯Hの杯蓋である。灰色（5Y6/1）を呈し、口径11.3cm、高さ3.6cmをはかる。天井部には、ヘラ記号がある。河北郡気屋（現かほく市）のもので、7世紀前半に位置付けられよう。

図8-2は、古墳時代の須恵器杯Hの杯身である。灰色（5Y5/1）を呈し、口径10.2cm、高さ3.5cmをはかる。図8-1と同様に河北郡気屋のもので、やはり7世紀前半に位置付けられる。

図8-3は、古代の須恵器杯蓋を反転実測したものである。灰黄色（2.5Y6/2）を呈し、扁平なつまみがつく。河北郡刈安（現津幡町）のもので、9世紀前半頃に位置付けられようか。

以上3点は、出土地（採集地）不明品が多い四高考古資料の中で、石川県内のどこのものなのか明確な好資料である。須恵器標本としての学術的価値は高い。



- 1: 四高考古資料（加賀河北郡気屋 ※現かほく市）
- 2: 四高考古資料（加賀河北郡気屋 ※現かほく市）
- 3: 四高考古資料（加賀河北郡刈安 ※現津幡町）

図8 四高考古資料の須恵器実測図

なお、四高考古資料については、上記のほか、考古学ワークショップのために縄文土器底部の敷物圧痕調査も実施し、網代圧痕とスタレ状圧痕の存在を確認した。それについては、本誌別頁の「縄文時代の編物を題材とした考古学ワークショップの実践」に詳しくまとめたので、そちらを参照されたい。

3. 井上鋭夫発掘資料に関する調査研究

井上鋭夫発掘資料は、金沢大学の法文学部教員だった井上鋭夫氏が発掘調査したもので、金沢城跡（金沢城址）から出土した遺物群が主体となっている。ちょうど今年度は井上氏の金沢城跡発掘から半世紀の年にあたるということもあり（井上1969）、平成30年7月26日に金沢城跡発掘調査の当時を知る方々および現在の金沢城調査研究所の方々を中心に本学に招き、資料検討の場を設け

た（スペースの都合で、会場は筆者が兼務する金沢大学埋蔵文化財調査センターとした）。

具体的には、当時の発掘調査参加者の吉岡康暢氏・室山孝氏・河崎倫代氏、金沢城調査研究所の富田和氣夫氏・滝川重徳氏、両者の取りまとめ役の河村好光氏、そして金沢大学の足立拓朗氏・上田長生氏・筆者の9名で、本丸・本丸附段・二ノ丸・三ノ丸・三十間長屋などからの出土遺物（陶磁器・瓦・石製品・木製品・金属製品・種子など）や当時の記録類（日誌・図面・写真など）を実際に見ながら、現時点での情報整理をおこなった（松永2018c）。

2時間に及ぶ検討会の中で、資料の箱の中身に若干の混乱があることが判明する一方、当時の調査日誌（図9）や測量図面が非常に良い状態で残っていることや、二ノ丸石室を代表とする良好な遺構一括遺物が存在することが明らかとなった。

資料検討会の参加者からは、今後の調査・研究・活用について、様々な意見が出された。その中で、当該資料に対して、当面優先すべきことがはっきりしてきた。

優先事項の一つは、箱の中身の混乱解消と調査地点ごとの再整理である。元々ある程度は地点ごとにまとまっていたが、今後の調査・研究を円滑に進めるためには、全ての資料収納箱を一通り見直し、混乱がなく機能的かつコンパクトな形に整理し直す必要がある。

また、遺構一括遺物の整理・調査・研究も、優先順位を高く設定すべきである。特に二ノ丸石室では、土師質土器皿や下駄、種子、釘隠しなどがまとまって出土しており、当該遺構の測量図面も合わせることで、非常に良い研究材料となろう。

測量図面と言えば、井上鋭夫発掘資料の記録類の中には、かなり精度の高い遺構図面が含まれている。それらを現在の水準で整備（スキャニングおよびデジタルトレース）すれば、近年の発掘調査図面と組み合わせて活用することも大いに期待できる。

井上鋭夫発掘資料の金沢城跡出土遺物や記録類は、何と言っても金沢城の史上初の発掘調査成果である。金沢城が全国的に注目される中、その価値は学内外に積極的に発信すべきであろう。

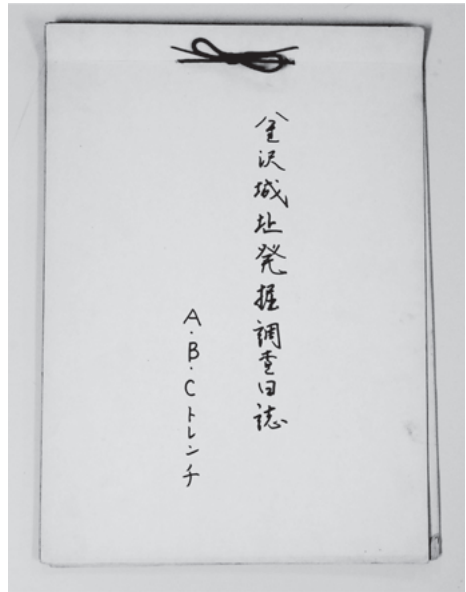


図9 昭和43年の金沢城跡発掘調査日誌

4. 一乗谷朝倉氏遺跡出土資料に関する調査研究

一乗谷朝倉氏遺跡出土資料は、井上鋭夫氏が昭和45年8月21日～25日の5日間で緊急調査したものである。農業構造改善事業の水田区画整理に端を発するもので、児童文学者の勝尾金弥氏（作家名としては「かつおきんや」）の著書にも当時の調査の経緯が登場する（かつお1986）。その出土資料が、緊急避難措置として金沢大学に移送され、そのまま当資料館に引き継がれた（在田・橋爪・三浦1995）。今年度は、四高考古資料、井上鋭夫発掘資料（金沢城跡出土資料）の順に調査研究の重点を置いたため、本資料群については銭貨の見直しのみをおこなった。

一乗谷朝倉氏遺跡出土資料に登録されている銭貨4点は、上城戸（城下町南側の防御施設）の

外側の斎藤屋敷から出土したものである。いずれも青錆が生じており、決して状態は良くないが、銘は何とか判読することができた(図10)。4点全て北宋銭で、皇宋通寶(1038年初鑄)、治平元寶(1064年初鑄)、元豊通寶(1078年初鑄)、聖宋元寶(1101年初鑄)が各種1点ずつ認められた。これらは中世の流通銭としては一般的なものであるが(永井1994)、当資料館所蔵資料の中から出土地が分かる形で確認できたことには十分意義があろう。

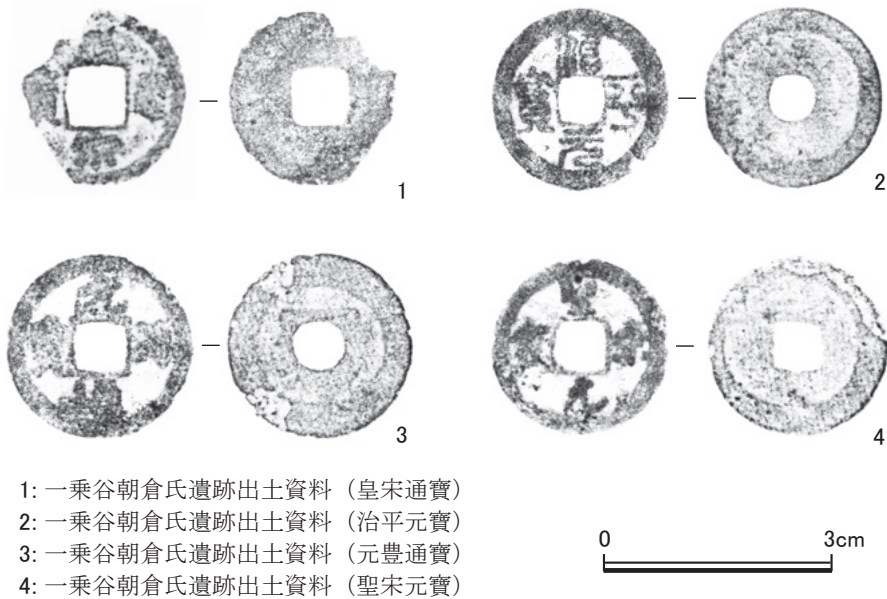


図10 一乗谷朝倉氏遺跡出土資料の銭貨

5. その他の考古資料に関する調査研究

金沢大学資料館には、現在四高考古資料・井上鋭夫発掘資料・一乗谷朝倉氏遺跡出土資料などとして台帳登録されているもの以外の考古資料も存在する。それらについては未だ整理途中であるが、一部をここに紹介する。

今年度の整理作業の過程で、縄文時代の石匙1点を確認した(図11)。現時点では来歴不明だが、収蔵状況などから見て、元々は四高考古資料か井上鋭夫発掘資料のいずれかに属する資料であった可能性が考えられる。井上鋭夫氏が歴史時代の専門家であったことなどを勘案すれば、特に前者のものであろうか。ただし四高考古資料と同じ遺物の図が一部掲載されている『北陸人類学会志』所収(斎藤1982)の石匙とは形態が異なるため、今のところ確証が得られ

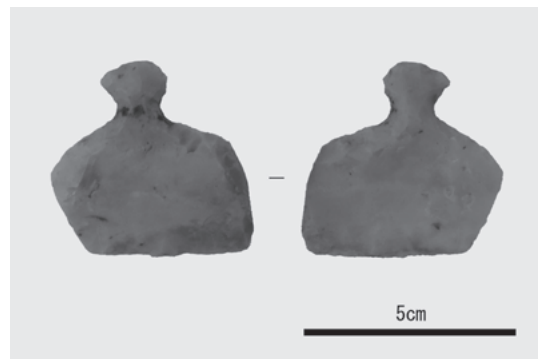


図11 台帳未登録の石匙

ない。

本資料は、やや黄味がかった灰白色（5Y7/2・8/2）を基調とする横型石匙で、長さ（縦）4.7cm、幅（横）5.0cm、厚さ1.0cm、重量19gをはかる。石材は珪質・石英質で、筆者が肉眼観察した限りではチャートの類と見られる。本資料は、欠損もなく、遺存状態は良好である。石匙は、石川県出身の中谷治宇二郎氏（雪の研究で有名な中谷宇吉郎氏の弟）が体系的に研究したことで知られ（中谷1925）、本学法文学部考古学研究室初代教授の上野佳也氏が個人所有を示す遺物として位置付けた石器として知られる（上野1961）。出土地などの情報が全くないのが残念であるが、それでも石川県および金沢大学の考古学に縁の深い資料として評価すべきであろう。なお、本資料は平成30年度秋季特別展「石の博物誌」に出展し、会期中の来館者に先行紹介した（松永2018b）。

6. おわりに

極めて雑駁な内容となってしまったが、昨年度末から今年度12月にかけて実施した調査研究については、上述した通りである。

四高考古資料については、遠隔地における資料収集活動の一端を知ることができ、また磨製石斧の石材選択を近年の研究成果に基づいて確認することができた。井上鋭夫発掘資料については、50年前の金沢城跡出土資料の調査・研究・活用の展望が見えてきた。一乗谷朝倉氏遺跡出土資料については、出土地が分かる形で北宋銭の種類を突き止めることができた。その他、台帳未登録の資料の中に学術的価値のあるものが眠っていることが明らかとなった。

しかし、今回示した成果は、金沢大学資料館所蔵考古資料が持つ情報の一部に過ぎない。これらの中には、まだまだ多くの有益な情報が内包されているのである。今後も様々な視点からこれらの資料を見直し、学内外の研究や教育に供したい。

本稿は、平成30年度石川県博物館協議会職員研究奨励事業（研究テーマ名「四高考古資料の整理と研究」）の助成金による成果の一部を含んでいる。昨年度に続き、筆者の研究にご助成頂いた石川県博物館協議会の皆様に、改めて感謝申し上げる。

また、四高考古資料の調査研究について、資料実見・観察などに際し神原雄一郎・津嶋知弘・津田早矢賀・拜郷哲也・宮島宏・横島道彦の諸先生・諸氏からご高配をいただいた。井上鋭夫発掘資料の調査研究については、足立拓朗・上田長生・河崎倫代・河村好光・滝川重徳・富田和気夫・室山孝・吉岡康暢の諸先生・諸氏から貴重なご意見をいただいた。ご厚意に心より御礼申し上げます。

さらに、本稿掲載の遺物実測や石材調査にあたっては、岡部睦・鏡百恵・山内花緒の学生諸氏の協力を得た。ここに明記し、感謝の意を表したい。

註

- 1) 2018年5月11日、平成30年度石川県博物館協議会総会において「金沢大学資料館所蔵考古資料の再評価」の演題で口頭発表をおこなった。さらにそれを、同会会報第82号において文章化（松永2018d）している。また、2018年3月28日より、資料館の常設展エリア（旧制第四高等学校コーナー）に四高考古資料の土器・陶磁器および実測図を、企画展エリア（春

季企画展「金大資料館コレクション展2018：保存と修復」、2018年7月4日終了)に四高考古資料の埴輪を解説付きで展示した。

- 2) 上米内駅は大正12年に開業しており、「上米内驛」の注記はどんなに古く見てもそれ以上遡ることはない。また、注記の筆致から見て、現代に下ることもないと思われる。

参考文献

- 在田則子・橋爪直子・三浦純夫 1995 「一乗谷朝倉氏遺跡出土資料について」『資料館だより』第6号、pp.2-4
- 在田則子 1996 「四高考古資料と北陸人類学会」『資料館だより』第7号、pp.10-11
- 在田則子 1997 「北陸人類学会群像」『資料館だより』第10号、pp.8-10
- 飯塚義之 2017 「ハンドヘルド蛍光X線分析装置を用いた石器石材分析の試み」『富山市の遺跡物語』第18号、pp.36-39
- 井上鋭夫 1969 「金沢城址の発掘」『金沢大学法文学部論集 史学編』16、pp.1-30
- 上野佳也 1961 「有柄石匕試論」『考古学研究』第8巻第2号、pp.24-30
- 岡山真知子・中川尚 2009 「段ノ塚穴型石室に関する若干の考察」『阿波学会紀要』第55号 pp.135-139
- かつおきんや (勝尾金弥) 1986 『一乗谷のなぞ』
- 草間俊一・吉田義昭 1959 『畑井野遺跡』
- 佐々木達夫・在田則子・大浜菜緒 1996 「金沢大学資料館所蔵考古学資料紹介 (2)」『資料館だより』第8号、pp.8-10
- 永井久美男 1994 『中世の出土銭』兵庫埋蔵銭調査会
- 中谷治宇二郎 1925 「石匙に対する二三の考察」『人類学雑誌』第40巻第4号、pp.144-153
- 中村由克 2010 「野尻湖遺跡群における石斧石材の再検討—「蛇紋岩」とされた石材の正体をさぐる—」『日本考古学協会第76回総会研究発表要旨』 pp.126-127
- 中村由克 2015 「石器石材とその原産地推定」『平岡遺跡発掘調査報告』 pp.277-296
- 中村由克 2017 「下鎌田遺跡の石製装身具の石材とその意義」『下仁田町自然史館研究報告』第2号 pp.27-32
- 斎藤忠 1982 『復刻日本考古学文献集成 北陸人類学会志』
- 松永篤知 2018a 「金沢大学資料館所蔵考古資料の再整理」『金沢大学資料館紀要』第13号、pp.17-25
- 松永篤知 2018b 「石と考古学—石からできた考古資料から見る石材選択—」『石の博物誌』、pp.14-15
- 松永篤知 2018c 「井上鋭夫先生発掘金沢城跡出土資料検討会」『石川考古』第337号、p.3
- 松永篤知 2018d 「金沢大学資料館所蔵考古資料の再評価」『石川県博物館協議会々報』第82号、pp.2-4
- 美馬市教育委員会 2012 「北陸人類学会の創始者 須藤求馬」『郷土の先賢たちの学びと業績』 pp.98-116
- 盛岡市教育委員会 1981 『志波城跡 I』